陳觀酉・陳福慶と琉球漢詩人

紺野達也

一　はじめに

現在、沖縄縣那覇市にある那覇市歴史博物館に「陳觀酉書七言絶句「杜牧詩」」と題される行書の作品が所蔵されている。この書は清代後期の陳觀酉が晩唐の杜牧の名詩「寄揚州韓綽判官」（揚州の韓綽判官に寄す）を記したものである。陳觀酉は道光十八年（一八三八）に琉球（中山國）の尚育王（在位一八三五―一八四七）の冊封のための使節（正使林鴻年、副使高人鑑）に随行して來琉した。彼は琉球滞在中の八月にこの書を揮毫し、おそらくは琉球の士族に渡したのだろう。(1)

この書のみならず、陳觀酉の詩作や關係する諸資料からも彼の來琉が確認される。しかし、これまでの研究では陳觀酉の琉球滞在時の詩歌や琉球の人士との交流について、充分に論じられてはこなかった。(2) それは、この時の冊封使節の遺した詩歌についての研究自體がそもそも多くなかったことが影響していると考えられる。また、通常の冊封ではその終了後に皇帝に呈上される「冊封使錄」がこの尚育王冊封時にはなかったこともこのように研究が不足している一因であろう。(4)

さらに、陳觀酉の子である陳福慶も、父の琉球滞在を契機として琉球漢詩人である蔡大鼎と面會している。しかし、この陳福慶については、本人が來琉していなかったためか、日中ともに全く研究がないと言ってよい。

本稿は、これまで充分に調査、研究されてこなかった資料や詩作を検討することで、陳觀酉・陳福慶父子と琉球漢詩人の關係について明らかにしたい。それによって、從來は全體像が必ずしもはっきりとしていなかった道光十八年の來琉冊封使節と彼等の琉球に關連する詩歌の情況、また冊封使從客と琉球漢詩人の關係についてもより具體的に理解できると考えられる。

二　陳觀酉の傳記について

まず、陳觀酉の基本的な傳記を確認したい。[5] 清・錢保塘『清風室文集』卷十に代作として「陳二山傳」を收錄する。[6] 長文にわたるが、これまでほとんど言及されていない資料であるため、全文を引用、訓讀する。（以下、特に明示しない限り、原文の句讀等は紺野による）

陳二山、名觀酉、字仲博、二山其號也。先世居海寧、曾祖鶴遷杭州、遂著籍爲錢塘人。性孝友、父沐疾侍湯藥、不就寢者旬餘。父沒、喪葬如禮、不用世俗之法、終喪不衣裘。母以憂女失明醫治弗廖、爲舐之數日而復。授徒里中、所入與弟共之、自奉極約而好急。朋友之難有告者、竭力謀之。嘗謂人曰、平日省一宴之費、可以資助一二人。識者韙之。少工書畫、能爲詩古文辭。年十九補縣學弟子員。嘗遊京師、高人鑑編修使琉球重其文學、招之同行。琉球人來問學、稱弟子者數人、後有入爲中朝貢使者、道出杭州、爲造廬問起居焉。既累試不得志、其戚李本仁爲江西南贛道、招往修贛州府志。三載書成、卒於南昌、年五十一、時道光二十九年四月也。著有客球雜記四卷、含暉堂詩文稾四卷。妻黃氏卒時、年甫三十一、遂不再娶。葬仁和縣西北之青龍山。子福慶、今江西候補通判。

論曰、聞之朝中士大夫、言琉球雖海東小國、然重文學、尤好爲歌詩、中國先後膺冊使者、率聘能詩之士、偕行以備擯介之選、非是則不敢應命也。二山以一諸生隨使者、涉海數萬里、儼然與其國王揖讓周旋、賦詩餽遺、使其國中文學之士來問學、願出其門。其文采風流傾動遠人如此。此亦文人壯遊豪舉、可以償平生之遠志矣。同治十二年。

（陳二山、名は觀酉、字は仲博、二山は其の號なり。先は世よ海寧に居り、曾祖の鶴は杭州に遷り、遂に籍を著けて錢塘の人と爲る。性は孝友、父の沐疾み、湯藥に侍し、寢に就かざる者旬餘。父沒し、喪葬するに禮のごとくし、世俗の法を用ひず、喪を終ふるも裘を衣ず。母女を憂ふるを以て失明し、醫治廖せず、爲に之を舐むること數日にして復す。徒を里中に授け、入る所は弟と之を共にし、自奉は極めて約して急を好む。朋友の難の告ぐる者有れば、力を竭して之を謀る。嘗て人に謂ひて曰く、平日一宴の費を省けば、以て一、二人を資助すべし。識る者之を韙みす。少くして書畫に工にし、能く詩・古文辭を爲る。年十九にして縣學の弟子員に補す。嘗て京師に遊び、高人鑑編修の琉球に使ひするに其の文學を重んじ、之を招きて同行せしむ。琉球の人來りて學を問ひ、弟子を稱する者數人、後に入りて中朝の貢使と爲る者有り、道に杭州に出で、爲に廬に造りて起居を問ふ。既に試を累ぬるも志を得ず、其の戚の李本仁江西南贛道と爲り、招かれて往きて『贛州府志』を修む。三載にして書成り、南昌に卒す、年五十一、時に道光二十九年四月なり。

著に『客球雑記』四卷、『含暉堂詩文稾』四卷有り。妻黄氏卒する時、年甫め三十一、遂に再びは娶らず。仁和縣西北の青龍山に葬らる。子の福慶、今江西候補通判たり。

論に曰く、之を朝中の士大夫に聞けば、言へらく、琉球は海東の小國と雖も、然れども文學を重んじ、尤も歌詩を爲るを好み、中國先後して冊使を膺くる者、率ね詩を能くするの士を聘き、偕行して以て擯介の選に備へ、是に非ざれば則ち敢て命に應ぜざるなりと。二山一諸生を以て使者に隨ひ、海を渉ること數萬里、儼然として其の國土と揖讓周旋し、詩を賦して餽遺し、其の國中の文學の士をして來りて學を問ひ、其の門に出づるを願はしむ。其の文采風流遠人を傾動すること此くのごとし。此も亦た文人の壯遊豪舉にして、以て平生の遠志を償ふべし。同治十二年。）

この記事から、陳觀酉は杭州錢塘縣（現在の浙江省に屬す）の人で、字は仲博、號は二山、嘉慶四年（一七九九）に生まれ、道光二十九年（一八四九）に南昌（現在の江西省に屬す）で沒し、故郷の杭州に葬られたことがわかる。その他、基本的な内容として、後述する著作に關する記述を除けば、①父母に孝養を盡くした、②通常は儉約していたが、友人には援助を惜しまなかった、③若くして書畫、詩文に巧みであった、④北京に赴いた、[7]⑤高人鑑の招聘に應じて琉球に同行し、琉球の人士が彼から學問を受けた、⑤親族の李本仁の招聘に應じて江西に赴いた、⑦妻の黄氏を三十歳代で亡くし、子に陳福慶がある、ことが記されている。

陳觀酉に關するまとまった傳記として、他に清の蔣寶齡の『墨林今話』卷十六がある。[8]

錢塘陳二山文學、觀酉、字仲博。多識里中前輩能述其往行。而四方之士寓武林者亦多識君。春秋佳日、湖上裙屐之游、君恆在焉。能詩工楷法、兼畫山水。詩清微澹遠、尤長五古、畫宗大癡。羅鑑泉題其畫云、十二橋頭人倚閲、依依柳色帶春寒、西湖寫出新風景、不作殘山賸水看。君自題元宵踏雪圖云、踏雪行吟夜正中、了無燈火試春紅、誰家園裏梅花發、撲面暗香來好風。二山年三十喪偶、不再娶、有悼亡詩六首、皆沈痛眞摯、讀之使人增伉儷之重。今聞從使者冊封琉球作海外之游、其詩與畫當一變矣。

（錢塘の陳二山文學、觀酉、字は仲博。多く里中の前輩を識り、能く其の往行を述ぶ。而して四方の士の武林に寓する者も亦た多く君を識る。春秋の佳日、湖上裙屐の游びに、君恆に在り。詩を能くし楷法に工にして、兼ねて山水を畫く。詩は清微澹遠、尤も五古に長じ、畫は大癡を宗とす。羅鑑泉其の畫に題して云ふ、「十二橋頭人倚閲し、依依たる柳色春寒を帶ぶ、西湖寫出す新風景、殘山を作さず賸水看る」、と。君の「自ら元宵踏雪圖に

題す」に云ふ、「雪を踏み行吟すれば夜正に中し、了に燈火の春紅を試す無し、誰が家の園裏梅花發かん、面を撲つの暗香好風來る」、と。二山年三十にして偶を喪ひ、再びは娶らず、悼亡詩六首有り、皆沈痛眞摯にして、之を讀めば人をして伉儷の重を增さしむ。今使者の琉球に冊封するに從ひ海外の游を作すを聞く、其の詩と畫と當に一變すべし。）

ここでは、⑧陳觀酉が杭州の先人の業績に熟知していたこと、⑨他地域出身の士大夫にも陳觀酉が知られていたこと、⑩西湖にしばしば遊んだこと、⑪楷書に巧みであるとともに、山水畫を元の黄大癡に學んだこと、⑫詩では五言古詩に優れていたことが確認される。このように、この記事も陳觀酉が詩書畫に優れた人物であることを示している。特に注目すべき點は、最後の「今使者の琉球に冊封するに從ひ海外の游を作すを聞く、其の詩と畫と當に一變すべし」という一文の存在である。つまり、蔣寶齡は陳觀酉の琉球滯在とほぼ同時期にこの記事を記している。そして、蔣寶齡はこの時は琉球における詩作を見ていないものの、その詩風・畫風の變化を予測している。

蔣寶齡の推測を裏付けるものが清の丁申・丁丙兄弟の『國朝杭郡詩三輯』卷四十である。[9] ここには陳觀酉の傳記の他、あわせて四十二首の彼の詩を收錄する。傳記のうち、關係する部分を引用する。

陳觀酉、字仲博、號二山、錢塘諸生。有含暉堂遺稿。

……嘗從高螺舟太史使琉球、何子貞編脩贈聯云、行萬里路、看三神山。由是涉重洋、跨絕島、詩乃益壯。佐李藹如方伯修贛州府志、世稱精核。子福慶、號子壽、爲江右別駕、雅有父風、工書畫、擅岐黄、活人甚衆。

（陳觀酉、字は仲博、號は二山、錢塘の諸生なり。『含暉堂遺稿』有り。

……嘗て高螺舟太史の琉球に使ひするに從ひ、何子貞編脩聯を贈りて云ふ、「萬里路を行き、三神山を看る」、と。是由り重洋を涉り、絕島に跨り、詩乃ち益ます壯たり。李藹如方伯の『贛州府志』を修むるを佐け、世精核と稱す。子の福慶、號は子壽、江右別駕たり、雅に父の風有り、書畫に工にして、岐黄を擅ままにし、人を活かすこと甚だ衆し。）

ここでは、子の陳福慶の傳記を簡單に記すとともに、『墨林今話』を承けるかのように、陳觀酉は琉球に渡った後、その詩がさらに豪壯なものとなったと述べている。實際、『國朝杭郡詩三輯』に收錄する四十二首のうち、三十二首は琉球の歷史・風土・習俗等を歌った七言絕句の連作「流求雜詠」（ママ）であり、その他の詩を含めて琉球關係の詩は三十六首に達する。そして、このような丁氏兄弟の陳觀酉の琉球滯在時における詩歌への關心、あるいは評價は―全一百卷という清代における杭州出身者の詞

華集の續編である『國朝杭郡詩三輯』の書物としての性格と規模を考えた場合―、彼等個人の見解とみると考えるよりも、當時の陳觀酉の詩作に對する一般的な評價とみるべきであろう。

これら陳觀酉の傳記に關する記事は、彼を詩・書・畫に秀でた典型的文人として捉えている。そして、その詩作や文學に言及する場合、琉球に渡ったことが注目されていたのである。

三　『含暉堂遺稿』について

彼の著作については、『含暉堂遺稿』（「陳二山傳」では『含暉堂詩文稾』とする）があるほか、親族である李本仁の『（道光）贛州府志』の編纂にも助力している。また「陳二山傳」では『客球雜記』四卷に言及している。『客球雜記』はその書名から道光十八年の冊封使に隨行して見聞した記錄であろうと判斷されるが、現在のところ同書は確認されていない。

陳觀酉の別集である『含暉堂遺稿』は「陳二山傳」が四卷と記すのに對し、現存する同治七年（一八六八）翁山官廨重刻本はいずれも二卷本である。[10] また「陳二山傳」は書名を〝詩文稾〟とし、また「能く詩・古文辭を爲る」と述べるものの、重刻二卷本『含暉堂遺稿』には文を收錄しない。

ところで、重刻二卷本は卷首に二篇の序文、末尾に子の陳福慶の識語を載せている。

そのなかで最も早い道光辛卯（十一年。一八三一）の張衢の序文には「一日以古今體詩稿倩余爲序以弁首」（一日、古今體の詩稿を以て余に序を爲りて以て弁首とするを倩ふ）とある。道光十一年は陳觀酉が來琉する七年前であり、この「古今體の詩稿」は明らかに現存する重刻二卷本と內容が異なっていた。

一方、陳觀酉の死後に記された咸豐辛亥（元年。一八五一年）十一月の蘇惇元序には、

> 今晤令子子壽於皖、索觀遺詩。其稿零落、余前所閱之冊已失去。子壽請余與李藹如方伯爲之選訂、將付剞劂。且乞余爲序并表墓之文。乃爲之別擇編爲二卷。
>
> （今令子の子壽に皖に晤ひ、遺詩を觀るを索めらる。其の稿零落し、余前に閱する所の冊已に失去す。子壽請ふらくは余に李藹如方伯と之が爲に選訂し、將て剞劂に付すを。且つ余に序并びに墓に表するの文を爲るを乞ふ。乃ち之が爲に別に擇びて編じて二卷と爲す。）

とある。つまり、かつて陳觀酉と交流のあった（引用箇所の前段で詳細に回想している）蘇惇元はもともと何らかの形でまとめられていた陳觀酉の詩文集を少なくとも目にしていた。あるいは蘇惇元はそれを所有していた可能性もあり、それこそ陳觀酉が張衢に示した「古今體の詩稿」だったかもしれない。いず

れにせよ、それはやがて失われ、蘇惇元は咸豐元年に改めて陳觀酉の子の陳福慶の委囑を受け、前述の李本仁とともに陳觀酉の遺作を取捨し、二卷本の形に編纂している。

さらに陳福慶の識語は次のようにある。

惜隨作隨棄、尠有存稿。道光己酉夏見背於南昌郡。不肖檢點行篋、僅拾遺稿二百餘篇。是年秋奉柩歸葬錢塘、復得賸墨零牋百數十首於家藏書篋、於是彙爲一冊。咸豐壬子、與桐城蘇厚子丈同客皖江藩廨、因乞爲選擇並經李丈藹如鑒訂、遂付梓人。明年春、賊竄皖城、先人平生著述書籍碑板悉被焚如。而是冊亦幾無復存焉矣。不肖原名士恭、己未秋更名福慶、援例來江、適於友人案頭見前刊本、亟持以歸。……重刻既竣、因誌梗概於後。

（惜しむらくは作るに隨ひ棄つるに隨ひ、存稿有ること尠し。道光己酉の夏、南昌郡に背かる。不肖行篋を檢點し、僅かに遺稿二百餘篇を拾う。是の年の秋柩を奉じて錢塘に歸葬し、復た賸墨零牋百數十首を家藏の書篋に得て、是に於いて彙めて一冊と爲す。咸豐の壬子、桐城の蘇厚子丈と同に皖江の藩廨に客たり、因りて選擇を爲すを乞ひ、並びに李丈藹如の鑒訂を經て、遂に梓人に付す。明年の春、賊皖城に竄れ、先人の平生の著述書籍碑板悉く焚如せらる。而して是の冊も亦た幾んど復た存する無し。不肖原と士恭と名づけ、己未の秋、名を福慶に更へ、例に援りて江に來り、適たま友人の案頭に於いて前刊本を見て、亟かに持して以て歸る。……重刻既に竣へ、因りて梗概を後に誌す。）

この識語は年月の記載がないが、蘇子惇の序よりも後に記されたものであり、二卷本の編纂と重刻の過程がはっきりとする。陳福慶は亡父の詩文を收集し、さらに蘇惇元等に編纂を依頼した結果、咸豐壬子（二年。一八五二）、二卷本『含暉堂遺稿』が完成、刊刻されるものの、翌年には戰火によって失われたかに思われた。しかし、己未すなわち咸豐九年（一八五九）に陳福慶は友人宅で咸豐二年刊二卷本を發見し、彼はそれをもとに同治七年に重刻した。

つまり、『含暉堂遺稿』はまず陳觀酉自編の別集が存在し（これがあるいは「陳二山傳」のいう四卷本の『含暉堂詩文稿』かもしれない）、後に咸豐二年に二卷本が新たに作られ、さらに同治七年に現在見られる、重刻本が刊行されている。このような編纂の經緯は、現在の二卷本が陳觀酉の全ての作品を收錄しているのではないことを示している。したがって陳慶福の識語に「作るに隨ひ棄つるに隨ひ」とあるように、實際にはそれよりも多くの漢詩文が存在していたのである。

四　陳觀酉の來琉と琉球漢詩人との交流

陳觀酉が來琉することになった理由は同郷出身の冊封副使、高人鑑[11]の招請に應じたことによる。

前述の「陳二山傳」の本文および論にいうように、清代、冊封使は自らも多くは進士であったにもかかわらず、詩に巧みであった人物を「從客」として招聘して隨行させた[12]。そして、それが果たされない場合は任命を斷ることもあったようである。したがって、高人鑑は同郷で、當時、北京に滯在していた陳觀酉を進士に及第していない諸生であったにもかかわらず、「能詩之士」として認めていたことになろう[13]。

ところで、「陳二山傳」は冊封使が從客を必要としたのは、琉球における特に詩歌を中心とした「文學」の重視のためだという。それを反映するように、琉球に赴いた陳觀酉のもとには琉球の人士が「問學」、すなわち學問の教授を受けに訪れた。この事實は琉球側の資料にも確認される。『東姓家譜（津波古家）』「十三世國興[14]」には次のようにいう。

道光十八年戊戌有冊封大典、奉命從副使高大人・從客陳仲博學習書詩文官話。

（道光十八年戊戌冊封大典有り、命を奉じて副使高大人・從客陳仲博に從ひ書・詩文・官話を學習す。）

陳觀酉・陳福慶と琉球漢詩人（紺野）

また『阮姓家譜（一世阮國）』「九世宣詔[15]」にも

道光十七年丁酉八月二十二日爲入監讀書事奉命充爲官生。……翌年五月、恭逢冊封大典、□（ママ）從副使高大人從客□（ママ）仲博先生、毎日入天使館授受其教。

（道光十七年丁酉八月二十二日、監に入りて書を讀む事の爲に、命を奉じて充てられて官生と爲る。……翌年五月恭しくも冊封大典に逢ひ、□副使高大人・從客□（紺野注、陳の字か）仲博先生に從ひ、毎日天使館に入りて其の教を授受す。）

とある。東國興（津波古政正。一八一六―一八七七）・阮宣詔（一八一一―一八八五）の兩者は、いずれもこの時の尚育王の冊封に伴って北京の國子監に派遣される官生であった。したがって、彼等は新國王である尚育王の命を承けて國子監への入學に備えて高人鑑や陳觀酉のもとに書や漢詩文、官話を學びに來たというのが實情であった[16]。

それでは、陳觀酉は琉球でどのような詩の交往があったのだろうか。重刻二卷本『含暉堂遺稿』は卷二に琉球滯在時（直前の作品を含む）には次の四十七首が確認される。

海上望琉球國

冊封禮成呈中山王二十四韻

琉球雜咏（三十二首）
蔡氏宗祠謁端明學士像（二首）
觀筆山主人毛世輝墨蘭
望仙閣
鑑水山莊
故法司向天迪園題壁（二首）
夏日諸子招集西街別墅
席上贈馬容齋紫巾官執宏疊前韻
放舟那覇港游奥山龍渡寺
龍潭觀競渡
螺舟太史招集停雲樓下賞菊
中秋前一夜集都通事鄭廷翼家待月風雨適至坐虜橋歸

これらの詩のなかで「冊封禮成呈中山王二十四韻」「席上贈馬容齋紫巾官執宏疊前韻」「放舟那覇港游奥山龍渡寺」「中秋前一夜集都通事鄭廷翼家待月風雨適至坐虜轎歸」「流球雜咏」（ママ）（ママ）の三十六首は上述の『國朝杭郡詩三輯』巻四十にも収録される。

ところで、現在、靜嘉堂文庫に所蔵される二冊の鈔本[17]（以下、「靜嘉堂本」と記す）には『槎上存稿』の撰者である趙文楷をはじめとして冊封使やその従客、あるいは中琉交渉に關係する人物の詩歌が收録されており、陳觀西の詩は「陳觀西藁」として第二冊に見える。この「靜嘉堂本」には「道光戊戌六月承安貞詞兄招集西街別墅卽席賦呈」「向園題壁二首」「冊封禮成二十四韻書奉中山王敎正」の四首を記錄しており、これらの詩歌が重刻二卷本『含暉堂遺稿』所收の詩と文字に異同が見られる點は注目される。たとえば「道光戊戌六月～」は重刻二卷本の「夏日諸子招集西街別墅」であり、詩題が詳細であり、かつ創作時期もより限定されている。また本文も大きく異なっている。このような異同が生じた理由は詩の傳來にあるのではなかろうか。前述したように陳觀西の詩文には現行の重刻二卷本『含暉堂遺稿』から遺漏した作品がある。すなわち、「靜嘉堂本」所收の詩は陳觀西が琉球に殘していった原稿もしくは別集から直接、記錄したものであり、一方、『含暉堂遺稿』所收の詩は後におそらく陳觀西自身が歸國後に整理、修正したものと考えられる。

以下、琉球漢詩人との交往が見られる作品について、重刻二卷本『含暉堂遺稿』を底本として檢討したい。

まず、現在の那覇市西で詠った七言律詩「夏日諸子招集西街別墅」詩を確認しよう。

雨後蒼苔上蠣牆[18]　雨後の蒼苔蠣牆に上る
輕風徐透葛衣涼　輕風徐ろに透りて葛衣涼し
好抽健鹿題蕉葉　好びて健鹿を抽きて蕉葉に題し
閒取文螺作酒觴[19]　閒かに文螺を取りて酒觴と作す
簷影近連榕樹蔭　簷影近くに連なる榕樹の蔭

簟紋清帶海波光	簟紋清く帶ぶ海波の光
客中喜結新吟侶	客中喜びて結ぶ新吟侶
氣沿蘭言一室香	氣は蘭言に沿ひて一室香し

この時、冊封使の宿舎である「天使館」にも近い西街別墅で開かれた酒宴に參集した人物については、現在のところ、ほとんどわかっていない。ただし、「靜嘉堂本」に「安貞詞兄[20]」とあり、重刻二卷本『含暉堂遺稿』第三句「好びて健鹿を抽きて蕉葉に題し」や尾聯「客中喜びて結ぶ新吟侶、氣は蘭言に沿ひて一室香し」とあり、中琉雙方の人物が參加していたこと、また兩者の閒で詩作の應酬があったことが窺える。

重刻二卷本『含暉堂遺稿』はこの詩の直後に「席上贈馬容齋紫巾官執宏疊前韻」（席上に馬容齋紫巾官執宏に送る、前韻に疊ぬ）を置いている。この「席上～」詩は「夏日～」に自ら次韻する形式を採用し、また「靜嘉堂本」所收の詩（注（18）を參照）の存在から、この二首は同時に作られたものと判斷できる。

鼓篋曾依數仞牆	鼓篋して曾て依る數仞の牆
舊游迴首海雲涼[21]	舊遊首を迴せば海雲涼し
中華流覽詩千首	中華流覽す詩千首
絕島相逢酒十觴	絕島相ひ逢ふ酒十觴
能道當年張博望[22]	能く道ふ當年の張博望

爭看今日魯靈光	爭ひて看る今日の魯靈光
紵衣笑指天家錫	紵衣笑ひて指す天家錫ふと
襟上痕餘紫茗香[23]	襟上の痕に餘す紫茗の香

この詩の馬容齋は首里の漢詩人である馬執宏（豐平良全。注（18）も參照）のことで、一八一〇年の前回の冊封の時に北京の國子監に留學した。馬執宏がこの西街別墅での雅會で返詩を詠んだか否かは定かではないものの、陳觀酉の詩にあるように、馬執宏は少なくとも官話によって國子監での留學における學習や讀詩などを說明したらしい。詩酒を備えるとともに往時を語るという、まさに風雅な宴會だったようである。

このような琉球の人士との雅會は他にも行われた。八月三日の冊封の典禮の直後、八月十四日、陳觀酉等は都通事の鄭廷翼（久米村人士）の家に集まって月の出を待った。おそらく、翌日の公式行事である中秋宴[24]に先立ち、鄭廷翼等は私的な宴會を催し、陳觀酉などを招いたものと考えられる。その歸りに陳觀酉が詠んだ詩が次の「中秋前一夜集都通事鄭廷翼家待月風雨適至坐虜橋歸」（中秋前一夜に都通事鄭廷翼の家に集ひ月を待つも、風雨適たま至り、虜橋に坐して歸る）である。

石臺高聳短垣齊	石臺高く聳え短垣齊し
俯見平橋柳外隄	俯して見る平橋柳外の隄

月影故遲明日滿　　月影故らに遲く明日滿ち
水光忽被晩煙迷　　水光忽ち被ひて晩煙迷ふ
尊前紫蟹肥初擘　　尊前の紫蟹肥えて初めて擘き
屋後荒雞晩更啼　　屋後の荒雞晩れて更に啼く
雨雨風風行不得[25]　　雨雨風風行くこと得ず
夜深籠鳥在塗泥　　夜深くして籠鳥塗泥に在り

この日も酒宴が設定され、秋の風味である蟹まで用意されていた。詩についての描寫は見られないものの、この日の宴會が私的に中秋前夜の明月を賞愛しようとしたものであったと考えられることから、詩の應酬が行われた可能性は充分にあったのではなかろうか。

陳觀酉と琉球の漢詩人の交往は、陳觀酉の在琉時だけではなかった。次の七言律詩「聞琉球向生克秀歿於福州詩以哭之」（琉球向生克秀の福州に沒するを聞き、詩あり以て之を哭す）は東國興や阮宣詔とともに官生として派遣され、道光二十一年（一八四一）に北京の國子監に入監した向克秀の死（道光二十五年（一八四五）十二月[26]）を江西で聞き、それを哭泣したものである。

猶記横斜寫蕙時[27]　　猶ほ記す横斜蕙を寫す時
豈知好種易離披　　豈に知らんや好種離披し易きを
自辭故國心常戀[28]　　故國を辭してより心常に戀ひ
愛學中華語獨遲　　中華を學ぶを愛するも語獨り遲し
萬里淒涼歸旅櫬　　萬里淒涼にして旅櫬歸り
三年辛苦有遺詩[29]　　三年辛苦して遺詩有り
峯青海上魂應在　　峯は海上に青く魂應に在るべし
淚灑西風奠一巵　　淚は西風に灑ぎ一巵を奠す

第四句の原注「生杭に過ぎる時に謁し」や上述の「陳二山傳」の「弟子を稱する者數人、後に入りて中朝の貢使と爲る者有り、道に杭州に出で、爲に廬に造りて起居を問ふ」のように、陳觀酉から學問を教授されたものは「弟子」と稱し、進貢使として北京に赴く、あるいは歸國する場合、杭州の陳觀酉の家を訪ねたという。したがって、向克秀もまた東國興・阮宣詔とともに陳觀酉のもとで學んでいたのである。

ところで、第一句の本文および原注「余中山に在りて會たま生の戲れに蘭葉數筆を畫くを見る」によれば、向克秀は蘭の繪を描いたらしい。また陳觀酉の來琉時にはすでに沒していたが、毛世輝の描いた蘭の墨繪を見て七言絶句「觀筆山主人毛世輝墨蘭」（筆山主人毛世輝墨蘭を觀る）を殘している。陳觀酉は畫業にもすぐれた典型的な文人であり、こういった繪畫も詩や冒頭で紹介した書と同様に、彼と琉球漢詩人の交流を圓滑にし、深化させていったと考えられる。

このように現存する資料や詩歌から、陳觀酉は官生として留學の準備をしていた琉球の人士を教育し、また、中琉交渉の擔當者やかつての官生と交流し、そこでは詩歌が媒介となっていたことが明らかとなった。陳觀酉の作品が現存するもの以上に存在していた可能性が高いことを考えると、實際にはより多くの詩が琉球漢詩人との交流に用いられていたのだろう。[30] 一方、現在は確認できないが、琉球漢詩人からの詩もあったと考えるのが自然である。そして、陳觀酉の書畫の才能もこの詩歌を介した交流に一定の役割を果たしたのである。

五　陳福慶と蔡大鼎

第一章で述べたように、陳觀酉の子の陳福慶も琉球漢詩人と交流があった。その琉球漢詩人が琉球最末期の漢詩人の蔡大鼎（一八一三―一八八五？）である。

蔡大鼎は同治十一年（一八七二）に朝京都通事に任命され、翌年、福州にわたり、同年中に福州・北京間を往復している。そして、この福州・北京間の旅の途次で詠んだ詩歌を福州に戻った後、『北燕游草』として刊刻している。[31]

この『北燕游草』に收錄される序文の一つは陳福慶によって記されている。

余少承庭訓、嘗聞先大夫述球陽之人物文秀、心嚮慕之。及長得晤阮君勤院・東君子祥・鄭君以宏・向君克秀、[32] 過杭州時、以所刻詩稿見贈。清詞警句、綽有餘妍。惜匆匆別去、彈指垂三十年、無從問訊。今年春、由江西入覲、適貢使來京、遇鄭元功世講、得悉諸世好近狀、并辱蔡汝霖使者出示北燕游草。摛奇探勝、俊逸清新、與曩所讀阮・鄭刻稿、洵足媲美。爰綴數語、以誌欽佩、兼攄相憶舊好之私、云爾。同治十二年四月錢塘愚弟陳福慶拜序。

（余少くして庭訓を承け、嘗て先大夫の球陽の人物文秀なるを述ぶるを聞き、心に嚮に之を慕ふ。長ずるに及び阮君勤院・東君子祥・鄭君以宏・向君克秀に晤ふを得て、杭州に過ぎる時、刻する所の詩稿を以て贈らる。清詞警句、綽ひに餘妍有り。匆匆として別去するを惜しみ、彈指三十年に垂なんとし、從りて問訊する無し。今年の春、江西より入覲し、適たま貢使京に來り、鄭元功世講に遇ひ、諸世好の近狀を得悉し、并びに蔡汝霖使者の『北燕游草』を出示せらるを辱けなくす。摛奇探勝、俊逸清新、曩に讀む所の阮・鄭の刻稿と、洵に媲美するに足る。爰に數語を綴り、以て欽佩するを誌し、兼ねて相ひ舊好の私を憶ふを攄ぶると爾云ふ。同治十二年四月錢塘愚弟陳福慶拜して序す。）

陳福慶と琉球漢詩人の關係で言えば、①父の陳觀酉の門弟であっ

た阮宣詔等四人（これによって鄭學楷（以宏）も陳觀酉のもとで學んだことが確認される）に杭州で面會しており、彼等の刊刻した詩集を贈與されている[33]、②同治十二年の蔡大鼎との面會は偶然によるものだという二點が注目される。

陳福慶と蔡大鼎の關係は、前者が『北燕游草』（北京到着時は當然、往路の詩だけであった）に序文を記したのみではない。蔡大鼎も七言絕句二首を陳福慶に送っており、『北燕游草』に收錄している。

次の詩は陳福慶（號は子壽）から陳觀酉の別集を贈られたことに感謝したものである。

恭謝陳子壽老夫子大人惠含暉堂詩集

恭しく陳子壽老夫子大人の含暉堂詩集を惠むに謝す

元龍意氣涵湖海　元龍の意氣湖海に涵し
大筆淋漓舌粲花　大筆は淋漓舌は粲花
珍重好將行篋去　珍重して好しく行篋を將て去るべし
長傳海國碧籠紗　長く海國に傳へん碧籠紗

この詩にいう『含暉堂詩集』が現在、沖繩縣史料編集室神山政良文庫に所藏される『含暉堂遺稿』か否かは確定できない。しかし、陳觀酉の『含暉堂遺稿』が琉球の漢詩人に贈與された、すなわち陳觀酉の詩が改めて琉球に將來した、少なくともその可能性があったと言うことはできよう。

この詩の直後に置かれた次の詩はおそらく陳福慶自身の詩と繪畫を贈られたことを謝する作品である。『國朝杭郡詩三輯』卷四十によれば、陳福慶も父と同樣、書畫に巧みであった。

恭謝陳子壽老夫子大人惠佳藻法畫

恭しく陳子壽老夫子大人の佳藻・法畫を惠むに謝す

豈唯畫似倪高士　豈に唯だ畫の倪高士に似るのみならんや
詩亦清如李杜才　詩も亦た清きこと李・杜の才の如し
合使鯫生焚筆硯　合に鯫生をして筆硯を焚くべし
三生何幸思悠哉　三生何の幸ありて思ひ悠かなるかな

詩題の「佳藻」や第二句でいう「詩」とは『北燕游草』「京中送行詩」に見える陳福慶の次の詩を指すと考えて良い[34]。

京都贈中山蔡使者　京都に中山の蔡使者に贈る

同治癸酉四月來京入覲、歡晤汝霖貢使、出示佳章、率成一律。

（同治癸酉四月に京に來りて入覲し、歡びて汝霖貢使に晤ひ、佳章を出示せられ、率かに一律を成す。）

停雲離緒鎮纏綿　停雲離緒鎮として纏綿

快向京華話夙緣　快く京華に向ひて夙緣を話る
捧讀新詩欣此日　新詩を捧讀すれば此の日を欣ぶ
追思舊雨憶當年　舊雨を追思すれば當年を憶ふ
宦游笑我浮蹤遠　宦游我を笑ひて浮蹤遠く
客舍逢君旅思鐲　客舍君に逢ひて旅思鐲かる
底事驪歌又催送　底事か驪歌又た送るを催す
西江東海共茫然　西江東海共に茫然

この北京での陳福慶と蔡大鼎の對面はまさしく邂逅であった。[35]また、おそらく兩者が交流を行ったのはおそらくこの一回だけであったと考えられる。この陳福慶の詩も、その内容は蔡大鼎個人を對象とするよりも、琉球漢詩人の一人との惜別といった色彩が強い。したがって、陳福慶が『含暉堂詩集』を蔡大鼎に贈ったのも彼自身への禮品というよりも、琉球に父の詩を改めて傳えて欲しいと願ってのことであろう。なぜならば、琉球は陳氏二代にわたって緣のある地であるとともに、文人であった父陳觀酉は特に琉球における作品が高く評價されたからである。このような陳福慶の願いは蔡大鼎も理解したようである。それゆえ、故國に傳えることを明確に述べているのである。

一方、蔡大鼎はなぜ、陳福慶に序文を求めたのか。その理由は自ずと明らかであろう。それは陳觀酉が一世代前の琉球漢詩人の師匠にあたる人物であり、詩・書・畫に優れた文人從客であったことを蔡大鼎が認識していたからであろう。そして、その子息から序文や詩、繪畫、何よりも陳觀酉の詩集を得られたことは琉球漢詩人の彼にとって非常に名譽だったのである。

六　結語

本稿では陳觀酉・陳福慶父子と琉球漢詩人の關係について、從來ほとんど檢討されてこなかった資料や詩作を用いて考察を行った。改めてその要點を整理すれば、以下のようになる。

A　陳觀酉は科擧に及第することはなかったとはいえ、詩・書・畫に秀でた典型的な文人である。また、その傳記・詩作において、琉球に渡ったことが同時代およびそれ以降の清人に注目、評價されていた。

B　現在の重刻二卷本『含暉堂遺稿』は陳觀酉の詩作の一部であり、その他の詩や文が存在していた可能性が非常に高い。また、琉球にはこの重刻二卷本『含暉堂遺稿』所收の作品とは文字に異同のある作品が傳わっており、その一部と思われるものが「靜嘉堂本」に記錄されている。

C　陳觀酉のもとには、北京の國子監に派遣される官生が國王の「命」すなわち命令によって書や漢詩文、官話を學びに來ており、それによって形成された師弟の關係は陳觀酉の歸國後

も繼續した。また官生の他にも、酒宴などにおいて詩歌を媒介にした交流が存在した。これらの交流では書や繪畫も交流を推進する機能を果たした。

D　陳觀酉の子の陳福慶と琉球漢詩人である蔡大鼎が偶然ではあるが、北京で面會した。陳慶福は蔡大鼎の『北燕游草』の序文を記すとともに、父の別集や自身の作品と思われる詩や繪畫を贈った。一方、蔡大鼎はそれらの惠贈を謝する詩を詠む。これらの行爲は典型的な文人であった陳觀酉の存在が基盤となっている。

これまで、陳觀酉が從客として參加した道光十八年の冊封については、冒頭でも述べたように資料の不足などから、漢詩文も含めて充分に研究されたとは言いがたい。そのようななかで、本稿は陳觀酉が琉球において四十二首の詩を詠んでいること、そして同時代の琉球漢詩人との交流およびやや遲れて登場する蔡大鼎との關係について現存する資料の範圍内で明らかにした。そして、これらの交流などにおいて、陳觀酉が詩・書・畫の才能に優れた典型的な文人であったことの重要性を指摘した。

今後はこれら四十二首への詩歌、特に連作「琉球雜咏」の研究ならびに道光十八年の冊封に參加した他の人物の詩文について檢討する必要があるだろう。

また來琉冊封使の從客に關する研究について言えば、一七五六年に來琉した王文治に注目することが多かった。言うまでもなく、知名度や影響力の點から言えばそれはむしろ當然のことである。しかし、前述の「陳二山傳」の論が記すように、當時、詩歌を中心とした「文學」の才能を持つ從客が不可缺であることが清の士大夫の共通理解となっていた。こういった從客が琉球漢詩人の知識・教養をどのように形成したかを考える場合、資料の制約があるとはいえ、他の從客に目を向ける必要もあるだろう。その時、陳觀酉・陳福慶の事蹟と彼等が遺した詩歌は極めて貴重な事例の一つとなり得るのである。

【注】

（1）　この書は那覇市歴史博物館所藏横内家資料の一つで、明治から大正にかけて沖縄縣に赴任した横内扶が所藏していたものである。那覇市歴史博物館編の圖錄『企畫展　横内家資料にみる琉球・日本の書』（那覇市歴史博物館、二〇〇八年一一月）六・七・一五頁を參照。横内家以前の所有者については未詳。現在、沖縄縣内で確認される陳觀酉の書については、他に道光十八年七月に宋の張無盡（張商英）の語を揮毫したもの（沖縄縣立博物館所藏で大嶺薫氏舊藏。登記番號九四五八）がある。

（2）　陳觀酉の來琉については前掲注（1）圖錄の他に、武藤長平「王文治と琉球」（武藤長平『西南文運史論』（同朋社、

一九七八年八月復刻版。初版は一九二六年、初出は一九一八年）四四五・四四六頁は「海邦綏撫の爲か康熙以降の册封正副使には翰林院に關係ある人が多い、卽ち……道光十九年（ママ）の林鴻年（正使、翰林院修撰）高人鑑（副使、翰林院編修）……等である。而してこれもやはり康熙（ママ）以降のことであるが册封使に附隨して從客といふものが入琉して居る、卽ち……道光十九年（ママ）の賴雪艅（書家）陳仲博（畫家）等であって」とある。

（3）この道光十八年の册封に關する詩歌の專論として、平良妙子「册封使節來琉時における詩文交流―『渡琉日記』を中心に―」（中國文史哲研究會『集刊東洋學』第九十四號、二〇〇五年一〇月）六三―八二頁がある。

（4）ただし、複數の福州の地方志（『侯官縣鄉土志』、『福州人名志』など）には林鴻年に『使琉球錄』があったことを記錄しているが、游勵『清代閩籍册封琉球使及其著作考』（福建師範大學碩士學位論文、二〇一〇年六月）三九・四〇頁は、このように記錄された理由を推測した上で、「我們審愼地認爲、在沒有完全見到林鴻年所撰這類著作的情況底下、尙且疑其無此著述」と否定的に結論する。なお、中琉閒の日程については、曾煥棋『清代使琉球册封使の研究』（榕樹書林、二〇〇五年三月初版）二七四・二七五頁によれば、この道光十八年の册封使は同年二月十日に北京を出發、四月二十四日に福州着、閏四月二十七日に南關から上船、五月四日に五虎門を出發、五月九日に那覇に入港している。また歸國時については「九月初旬、上船して」一〇月一二日に那覇を出港、同二〇・二一日に五虎門に入り、同二十八日に南臺で下船している。

一方、この時の册封を「戌の御冠船」とも呼ぶ琉球側の資料としては『歷代寶案二集』に關係する文書が收錄されており、徐玉虎「清宣宗道光一八年（一八三八）林鴻年册封琉球國王尙育事蹟考」（上）・（中）・（下）（國立政治大學歷史學系『國立大學歷史學報』。（上）は第八期（一九九一年一月）四三―八三頁、（中）は第九期（一九九二年一月）六九―一〇八頁、（下）は第十期（一九九三年一月）五一―七五頁）にまとめられている。また、現在、那覇市歷史博物館に所藏される「琉球國王尙家關係資料」では、この道光十八年に關する資料が七十三件に及ぶ。山田浩世「「尙家文書」所收冠船關係資料の總體的位置付け―「冠船方諸帳」を手がかりとして―」（琉球アジア社會文化研究會『琉球アジア社會文化研究』十四號、二〇一一年一〇月）七九―一〇二頁はこの資料のなかの「諸行政マニュアル・日記を目錄化した」（山田論文七九頁）冠船方諸帳（尙家文書一二八號）を論じる。ただし、同資料の記述內容と册封使およびその隨行員の漢詩文との關係については、今後の考を待ちたい。

（5）陳觀酉については、『清代詩文集彙編』（上海古籍出版社）

第六〇五冊所收「含暉堂遺稿」翁山官廨重刻本の影印の前に簡單な傳記が記されており、參考文獻として『墨林今話』卷十六、『兩浙輶軒續錄』卷二十一、『清風室文鈔』卷十を擧げる（五三〇頁）。

（6）民國二年（一九一三）清風室校刊本（神戸市立中央圖書館吉川文庫藏）を用いた。なお錢保塘が誰の代作として「陳二山傳」を記したかは未詳。

（7）後述の翁山官廨重刻本にある咸豐辛亥（元年。一八五一年）十一月の蘇惇元序に「丁酉後、遊燕薊泛琉球」とあり、陳觀酉が琉球訪問以前に北京に滞在していたのは道光十七年（一八三七）から翌年であったことがわかる。

（8）咸豐二年（一八五二）刊本（早稲田大學圖書館藏）を用いた。

（9）光緒十九年（一八九三）錢塘丁氏刊本（京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センター藏）を用いた。前掲注（5）『清代詩文集彙編』の陳觀酉の説明にある『兩浙輶軒續錄』卷二十一はこの『國朝杭郡詩三輯』を引用したものである。

（10）前掲注（5）『清代詩文集彙編』所收の影印の原本の所藏情報を記していない。『中國古籍總目・集部』（上海古籍出版社、二〇一二年七月第一版）二〇七七頁によれば、中國では南京圖書館に所藏が確認される。日本國内では沖縄縣史料編集室神山政良文庫にのみ確認される。（文末に書影の一部を載せる）なお、同書については高津孝・榮野川敦『增補琉球關係漢籍目錄　近世琉球における漢籍の收集・流通・出版についての總合的な研究』（二〇〇五年三月）に著錄されるが、藏書印は「神山藏書」が正しい。

（11）高人鑑は生卒年未詳（沒年は道光二十七年（一八四七）頃と考えられる）、錢塘の人である。基本的な傳記は前掲注（4）曾著書二八七―二九二頁を參照。ただし、同書で紹介される國立故宮博物院（臺北）所藏『兩浙耆獻傳略』卷二十六の記事は實際には前掲注（9）にあげた『國朝杭郡詩三輯』卷四十九に依據していると考えられる。

（12）前掲注（2）武藤論文は從客の誕生を康熙二年（一六六三）以降とする。なお島尻勝太郎『近世沖縄の社會と宗教』（三一書房、一九八〇年第一版。初出は一九七三年）二三―二五頁は「冊封使には、正使に三人、副使に一人の從客がつけられた。從客とは正副使の隨員であり、書畫、音樂、醫術等にすぐれた者を、祕書格として帶同するのが例であった。……冊封使が、從客を帶同する目的は、長期滯在中の兩使者の無聊を慰めるのと、書畫の揮毫を求められた時の用意、琉球の文人との應對等にあったと思われる」という。

（13）重刻二卷本『含暉堂遺稿』卷二の七言律詩「高螺舟編修人鑑使琉球冊封邀余同往將行留別都中諸朋友」は高人鑑の招請を受けた陳觀酉が北京から出發したことを示している。ただし、この詩以前に陳觀酉と高人鑑の間に交流があった

ことを示す資料は重刻二卷本『含暉堂遺稿』などに確認できない。また道光二十年（一八四〇）に「庚子科廣東鄉試の試驗官」（前掲注（4）曾著書二八九頁）となった高人鑑を北京で見送った七言律詩「送高螺舟侍御典試粤東兼懷戴醇士學使熙」の後の兩者の交往も確認されない。言うまでもなく、上述したように重刻二卷本『含暉堂遺稿』に收錄されていない詩が存在していたため、高人鑑の冊封副使任命以前に兩者の間に交流がなかったと斷定することはできない。

（14）那覇市企畫部市史編集室編『那覇市史 資料篇 第一卷七家譜資料(三) 首里系』（那覇市企畫部市史編集室、一九八二年一月）四八九頁。

（15）那覇市企畫部市史編集室編『那覇市史 資料篇 第一卷六家譜資料(二) 上 久米系』（那覇市企畫部市史編集室、一九八〇年三月）一七一頁。

（16）東國興・阮宣詔が高人鑑・陳觀酉のもとで學習したことは前掲注（1）圖錄一五頁にも說明される。ただし、前掲注（14）の排印本家譜では「書」となっており、圖錄の「經書」とはなっていない。

（17）靜嘉堂文庫編『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄』（靜嘉堂文庫、一九三〇年一二月）八三四頁では冒頭で『槎上存稿』として著錄される。このなかには道光十八年の冊封正使である林鴻年、副使の高人鑑、隨行員の一人である林增高（前掲注（3）平良論文六八・六九頁を參照）の詩が收錄されている。なお、同書は薩摩出身の寺田望南（一八四九―一九二九）の印である「讀杜草堂」の印がある。

（18）「靜嘉堂本」の詩の本文は次の通り。

曲曲廻廊短短墻、風來徐透葛衣涼。頻揮塵尾通華語、刊坐蕉陰遞酒觴。諸子超如韋主簿、名公巋若魯靈光、康成庭草生書帶、映入書檻字亦香。

なお、第六句に「謂馬君客齊（ママ）。前冊封時、入大學讀書、今猶健在」という原注がある。

（19）原注に「別墅與使館相望、館中榕樹、冊使徐澄齋先生手植」とある。

（20）清・孫衣言編『琉球詩錄』（道光二十四年序刊本。同一內容のものに『琉球詩課』がある。本稿ではハワイ大學阪卷・寶玲文庫本『琉球詩錄』・『琉球詩課』（沖繩地域學リポジトリデジタルデータ）に依據した）卷一に阮宣詔「寄呈鄭夫子安貞毛夫子克進」、卷二に鄭學楷「寄鄭安貞師」、卷四に東國興「呈鄭安貞夫子」がある。

（21）原注に「前冊封時讀書太學者四人、今惟君無恙」とある。

（22）原注に「聞君縷述前冊封事」とある。

（23）原注に「君衣中國製、謂余曰、蒙睿皇帝所賜」とある。

（24）冊封正使の林鴻年は翌日の琉球王府主催による中秋宴に參加し、詩を殘している。下地智子「沖繩における新聞の誕生と漢詩」（曲金良・修斌主編『第十二屆中琉歷史關係國

中國詩文論叢　第三十三集

際學術會議論文集』（北京圖書出版社、二〇一〇年一二月第一版）二一七頁を參照。ただし、從客の身分であった陳觀酉が參加したか否かは未詳。

(25) 原注に「虜橋如籠鳥」とある。

(26) 前田舟子「清代琉球官生派遣年表」（赤嶺守・朱德蘭・謝必震編『中國と琉球　人の移動を探る—明清時代を中心としたデータの構築と研究』（彩流社、二〇一三年三月初版）三一六頁を參照。

(27) 原注に「余在中山、會見生戲畫蘭葉數筆」とある。

(28) 原注に「生過杭時、謁忽作漢語、前此未之聞也」とある。

(29) 原注に「向生在國子監肄業三年」とある。

(30) たとえば「琉球雜咏」など、直接的には交往が確認できない詩であっても、創作の前提となる知識の多くは琉球側から得たものであることは疑いない。

(31) 同治十二年刊『北燕游草』は現在、沖縄縣立圖書館東恩納寛惇文庫および山形大學附屬圖書館小白川圖書館（舊林泉文庫藏）に所藏される。本稿では基本的に前者を用いたが、缺落している二十丁については山形大學附屬圖書館小白川圖書館藏本によって確認した。

(32) 原注に「曾讀書太學爲先大夫門生」とある。

(33) 前掲注（20）の四卷本『琉球詩錄』（『琉球詩課』ともいう）をいう。

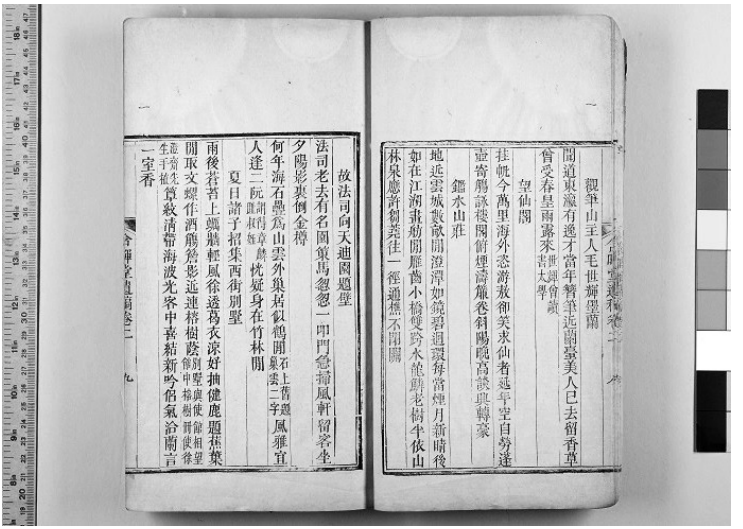
(34) 原本は陳慶福と誤刻する。

(35) 附言すれば、現存する作品の範圍内では陳觀酉が琉球においてまだ十六歳の蔡大鼎と直接に交流した形跡は確認できない。

※調査に當たっては、各種資料の所藏機關および早稲田大學文學學術院助手の石碩氏の協力を得ました。改めてあつく御禮申し上げます。

※本稿は、日本學術振興會科學研究費「新出資料による琉球處分期琉球知識人の總合的研究—そのアイデンティティに着目して」（基盤研究（B）（一般）、研究代表者高津孝、研究課題番號26283009、二〇一四年～二〇一六年）による研究成果の一部である。

【寫眞一】沖縄縣史料編集室神山政良文庫『含暉堂遺稿』封面



【寫眞】同卷二